ギリシア的身体観の成立に関する研究 (1)*

——ホメロスにおける身体表示語の分析——

林　英彰・片岡暁夫

A study on the development of the Greek view of body (1)

——An analysis of the words denoting body in Homer——

Hideaki HAYASHI and Akio KATAOKA

In this paper, as the first part of "A Study on the Development of the Greek View of Body," the authors tried to clarify the characteristics of the Homeric view of body in his *Iliad* and *Odyssey*.

As B. Snell's theory about the Homeric view of body has been thought by many scholars and the authors themselves as an epoch-making one, this analysis took the form of a criticism of his theory.

The authors agreed with Snell in some points (mainly about the limbs-denoting-words, e. g. gyia, melea). But Snell's theory was also found to be modified in many points, (especially about the shape-stature-denoting-words, e. g. demas, eidos). The authors' conclusions were as follows :
In Homer, there appeared such characteristics as "soul antonymy," "liveliness," "wholeness," "unity," and "mobility," which we the modern attribute to body. But he did not have a single word to include all the characteristics in one. Therefore, body was not recognized as in the classical period and after. Rather, it was the most remarkable feature in Homeric view of body that he recognized body without any conclusive concept.

Key words : Greek view of body, Homer, Shape-stature-denoting-words, Limbs-denoting-words, Sōma

I. 序

本稿の課題は，ホメロスにおける身体表示語の分析を通して，ホメロス的身体観の特徴を浮彫りにすることである。

ギリシア古典期の哲学において《からだ，身体》(sōma) という概念は《こころ，霊魂》(psȳchē) の概念とともに，人間の本性の考察において極めて重要な役割を果たしていたのであり，sōma を抜きにして，ギリシア人たちの人間観を理解することは不可能である。古典期においては，sōma は psȳchē と対で用いられるのであるが，しかし，人間を《psȳchē-sōma》という分節によって把握する仕方を，いったい誰が，何時頃，始めたのであろうか。この問いが本研究の原動機である。

体育という概念が成立するためには，実体としてであれ概念としてであれ，何らかの契機たる項として《身体》が把握されていなければならない。この概念構成に際して，我々が直接に多くの影響を受けているのはプラトンやアリストテレスの思想からであるが，psȳchē-sōma という分節方式そのものは，彼らに先行する多くのギリシア人たちによって徐々に培われてきたものである。ギリシ

*本研究の一部は，平成3年度筑波大学学内プロジェクト「古代ギリシアの身体観に関する研究」(研究代表者，林英彰) の補助を受けた。

ア人による身体把握の原初形態がいかなるものであり，それがどのように受け継がれ，古典期における身体観へと展開していったのか，その間の事情を検証することが本研究全体の企図である。

ところで，《こころ》，或いは《精神》の観念の成立については，既に多くの研究者によって相当に詳しい分析が与えられており[7~12,14,22,24,25]，《心—身》を一対のものと見る限り，一方の観念の成立を以て他方の観念の成立を主張することは正当であるとも考えられる。実際，こころや精神の問題を取り扱った研究者たちは，多かれ少なかれ身体の問題にも触れている。しかし，徹底して身体の問題に焦点を当てた研究は，これまで為されてこなかった。しかも，スネル[25]をはじめとする古代詩研究者らによれば，ギリシアにおける《心—身》関係の把握方式は，いきなり《psȳchē-sōma》というかたちで定式化されたわけではなく，初期においてはこころや精神の観念も身体のそれも多様な語によって表示されていたのである。さらに言えば，身体観の成立というような問題については，時間的にも地域的にも，或いは作品のジャンルや学派といった問題も含めて，かなりの幅を以て考えなければならない。従って，ギリシア的身体観の成立事情の検証という本研究の目的を果たすためには，やはり身体の問題に焦点を当てた検討が必要なのである。

第一報たる本稿では，ギリシア文化の揺籃とも言うべき二大長編叙事詩，『イリアス』及び『オデュッセイア』(以下，それぞれ *Il.* および *Od.* と略記することがある）に焦点を絞って議論を進める。ホメロスの身体観については，スネル（B. Snell）の画期的な論文[25]があるので，これを手掛かりとし，本稿はその批判的検討という形式を採ることにする[註1]。底本として使用したテクストはモンロー&アレン校訂の『ホロメス作品集』[1]であるが，その他にもいくつかの原典，翻訳を参照した[2~5]。

本研究では，いわゆる「ホメロス問題」[註2]には立ち入らないことにするが，ホメロス作品が古くからの神話や伝承を下敷きとする口承文学であることには注意を要する。つまり，ホメロス作品の内には極めて古い時代の語と比較的新しい時代の語が，場合によってはホメロス以後に紛れ込んだ語が混在していると予想されるのである。しかもそれらは厳密な論理に従って編まれたものではないのであるから，あまりに頻度の小さな語についてあまり多くの事柄を語ることはできないであろう。

また，ホメロスの詩は両者を合計して27,803行に及ぶ詩行の総てが dactylic hexameter（長短々律六脚詩型）によって構成されていることにも注意を払わねばならない。観念上代替可能な複数の単語がある場合，韻律の都合や語呂合わせによって語が選択されている可能性もあるからである。しかし，以下に見られるように，代替可能な複数の語があるということはむしろ筆者の主張を支持するものであり，代替可能性は身体的事象に関わる諸語をいくつかの語群に分類する根拠でもある。より精密な論述の為には表2に示す用例の総てを逐一引用すべきであろうが，それは本稿に与えられた紙数を大幅に超過することになるので，割愛せざるをえなかった。

なお，いわゆる体育学の領域におけるホメロスの取り扱いは，その大部分が《競技》（aethlon, agōn）を主たる関心事とするスポーツ文化史的なものであり，ホメロスの身体観を直接の課題として論じる身体思想史的研究は希である。筆者の知る限りでは，水野[21]がごく簡単に触れているのが唯一のものであるが，彼の論点は，要するに「立派な体格がホメロスによって重視されていた」という断片的事実の指摘に過ぎないから本稿の先行研究として批判の対象となる性質のものではない。

II．ホメロス的身体観に関するスネル説の批判的検討

スネルは『精神の発見』[25]の第1章「ホメロスにおける人間把握」(Die Auffassung des Menschen bei Homer : S. 13-29) において，ホメロスが《魂》もしくは《精神》を表す固有の言葉を持っていないという事実を指摘し，このことがホメロス的人間観の解釈にとって極めて重要であると主張しているのであるが，《身体》の問題はその予備的考察として与えられている。

II—1　スネル説の梗概

ここでまず，ホメロス的身体観に関するスネルの見解がどのようなものであるかを概観してみることにしよう。(以下において，〔　〕内は引用者による補意である。)

・ホメロスにおいては，後に身体を代表的に表示することになる sōma は専ら死体を意味し，

demas が生体を意味する。しかし demas は，《身体という語の貧弱な代用品》（kümmerlicher Ersatz）に過ぎない。なぜならこの語は《関係の対格》[注3]においてしか用いられないからである。ただし，ホメロスの用語の内で後代の sōma〔の意味〕に多少なりとも対応しているのは demas である[注4]。

・「疲れる」「震える」「汗が噴き出る」「力が漲る」といった〔具体的な動きや様子の〕表現においては，gyia と melea という《四肢》を意味する複数形の語が用いられる。さらに，hapsea と rhethea という語も有るが，これらは殆ど問題にならない。なぜなら，前者は頻度が少なすぎるし，後者を《四肢》と解することは誤解に基づくものだからである[注5]。

・また「自分の体を洗う」とか「槍が体にささる」という表現においては，chrōs という言葉が用いられる。これは《皮膚》を意味する語であるが，解剖学的意味での皮膚を意味する derma とは異なり，特定の言い回しにおいては事実上身体を表している。

・以上の内，複数形で用いられた gyia と melea だけが，《身体の具象性》（Körperlichkeit des Körpers）を表現する。chrōs は身体の外郭（Grenze）に過ぎず，demas は関係の対格においてしか用いられないからである。

・以上の言語的特徴は，絵画においても認められる。ホメロス時代の絵と近代人の子供の描いた絵とを比べてみると，共に素朴な絵でありながら著しい対照を成していることがわかる（図1参照）。初期ギリシア人の絵（右）は人間の《可動性》（Beweglichkeit）を捉え，子供の絵（左）は人間の《緊密性》（Kompaktheit）を捉えている。

・初期のギリシア人たちは言語においても造形芸術においても，身体を統一体として把握してはいない。おそらく初期の時代の語り手は，身体的な事柄に言及する時，人名を上げるとか，或いは「人間だ」と言えば事足りたのであり，その人物のもっと細かい描写をする際に，差し当たり，四肢の並び具合その他の具象的な事柄が示されたのである。

・初期ギリシア人たちも《身体》を持ってはいた。しかし彼らは身体を《まさに身体として》（als Körper）知っていたのではなく，《四肢の総計》（Summe von Gliedern）として知っていたに過ぎない。ホメロスは，すばしこい脚，躍動する膝，力漲る腕，といった表現を多用している。彼にとっては，四肢こそが《生命を持つもの》であり，彼の注意を惹き付けるものなのである。

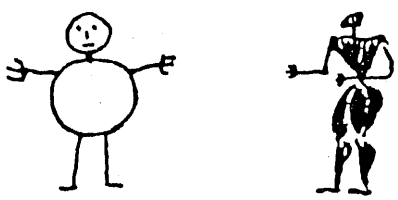

図1　2つの素朴な人体画像（Snell, 1986: S.17）
※図の名称は引用者の責任に拠る

以上をさらに要約すれば，ホメロス的身体観に関するスネル説の要点は，次のようにまとめられるであろう。

①《sōma》は専ら《死体》を意味した。

②《生体》を意味するのは《demas》であるが，これは《貧弱な代用品》に過ぎない。

③《皮膚》を意味する《chrōs》も身体を表示しうるが，これは身体の《外郭》を意味するに過ぎない。

④《四肢》を意味する複数形の語だけが身体の具象性を表現している。

⑤《身体》を表示する語は多種多様であり，文脈（場面・言い回し）によって使い分けられている。

⑥ホメロスにおいては人間の身体を有機的・統一的なものとして表現する用語は無く，従ってそのような見方も無かった。

II—2　スネルによって指摘されなかった身体表示語の抽出と分類

以上に概観されたスネル説においては8語が検討の対象とされたのであるが，これら以外にも《身体》を意味，或いは表示しうるギリシア語がある。試みに，いわゆる《逆引き辞書》として定評があるウッドハウスの辞書[27]で《body》の項を引いてみることにしよう。

Body, subs. *σῶμα, δέμας,* see also *flesh. Dead body* : *νεκρός, σῶμα, νέκυς, δέμας. Trunk* : *κύτος. Frame* (of things) : *σῶμα* ; see *frame.*[注6]

次に，flesh, trunk, frame の項を引いてみると，

また幾つかの語例と類義語が挙げられている。これを数回繰り返した結果，body (alive or dead), trunk, frame, shape, appearance, flesh, skin といった英語によって表示される観念群に対応するギリシア語が表１のように抽出された。

表１中，太字で示された語が実際にホメロスによって使用されている語であるが，これらの内，morphē と agalma を考察の対象とする必要は無い。この２語は明らかに人間や動物の姿という意味では用いられていないからである。従って我々は，ウッドハウス辞書を頼りに，12の身体表示語をホメロス作品中から抽出したことになるが，これらを，スネルによって指摘された８語と比較してみると，次のように整理される。

〔A〕スネルのみ　gyia, melea, hapsea, rhethea
〔B〕共　　通　sōma, demas, chrōs, derma
〔C〕ウッドハウスのみ　nekros, nekys, eidos, kreas, opsis, rhīnos, sarx, chroiē (＝chroiā)

〔A〕群の各語がウッドハウス辞書から抽出されなかった理由は，我々が《body》をキー・ワードとしていたことに拠るものであろう。ウッドハウスにおいては（そしておそらくは，英語圏の人々にとっては一般的に），１個の緊密な実体を意味する《body》から，本体とは区別される付属品的な語感を伴う《limb(s)》への連想は働かなかったのであろう。しかし我々が，これを理由として，〔A〕群の語を考察の対象から除外することは許されない。なぜならば，「近代欧語における body 等とは全く異なる身体の表示法がホメロスにおいて顕著に認められる」という点がスネル説の枢要なのであるから，これを無視することはスネル説を全く無視することに他ならないからである。また〔C〕群の語にスネルが言及しなかったのは，彼にとっての主要な論題が《精神》であって《身体》ではなかったという理由に拠ると思われる。彼は，身体については，彼の主張にとって必要とされる最小限の事柄だけに言及すれば事足りたのである。

しかし我々は，身体に関するより詳細な分析を試みているのであるから，以上に抽出された16語を総て考察の対象としなければならない。しかし，これらを一挙に検討することはできないから，現在最良のギリシア語辞典と言われるリデル＆スコットの辞書[20]の助けを借りて，或る程度の整理をしておきたい。その語釈に従えば，ホメロスにおける身体表示語は次のように分類される。(1)死体，屍》(sōma, nekros, nekys)，(2)《体つき，容姿，見目》(demas, eidos)，(3)《四肢》(gyia, melea, hapsea, rhethea)，(4)《皮膚，体表面，肉》(chrōs, derma, kreas, sarx, rhīnos, chroiē)，である。表２は，以上の16語に，megethos と phyē の２語を加えた計18語のホメロス作品中における使用箇所の一覧である[注7]。

むろん身体の存在は，手，足，頭，等の器官名称，人名や代名詞，中動相動詞（再帰的用法）などによって表示されることもあるが，このような表示法が《身体観の成立》という本研究の主題に関わるところは小さいと言わなければならない。

II－３　sōma, nekros, nekys ——生体か死体か

スネル説の第一論点は，「sōma は専ら死体を意味する」というものであった。表２に示されたように，ホメロス作品中に使用されている sōma は８

表１　ギリシア語における身体表示語の一覧（Woodhouse[27]に基づく）

body	shape/stature		flesh	skin
sōma	schēma	**sōma**	**sarx**	**chrōs**
demas	**eidos**	**demas**	**chrōs**	**chroiā**
nekros	ideā		**kreas**	exōthen sōma
nekys	**morphē**		**sōma**	**derma**
kytos	morphōma			byrsa
	opsis			dorā
	agalma			deros
	eikōn			deras
	andriās			**rhīnos**

表 2　ホメロスにおける身体表示語使用箇所の一覧（Gehring[13]に基づく）

A-Ω : Iliad, α-ω : Odysseia. ＊＝double.

(1) body (dead)

sōma	Γ23, H79, Σ161, X342, Ψ169, λ53, μ67, ω187
nekros	Δ467, 493, 506, E298, 573, 620, Z71, H332, 376, 395, 408, 428, 431, K493, N194, Π545, 579, 629, 641, 644, P13, 104, 108, 235, 275, 300, 317, 357, 412, 509, 581, 589, 635, 713, 718, 722, 734, Σ158, 164, 540, T26, Φ235, 343, 348, X259, 367, Ψ13, 51, 165, 197, Ω137, 139, 151, 180, 655, 709, 787, κ526, λ34, 475, 632, μ10, 13*
nekys	A52, Δ492, E397, H84, 409, 418, 420, Θ491, K199, 298, 343, 349, 387, Λ534, N509, O118, 251, Π72, 321, 526, 565, 577, 661, P121, 127, 240, 277, 394, 692, 724, 735, 746, Σ20, 152, 173, 180, T225, Υ499, Φ218, 220, 302, 325, X386, Ψ34, 110, 135, 160, 168, 190, Ω35, 108, 423, 581, 697, κ518, 521, 530, 536, λ26, 29, 37, 49, 94, 147, 485, 491, 541, 564, 605, μ383, χ271, 401, 407, ψ45, ω417

(2) shape/stature

demas	A115, E801, Θ305, Λ596, N45, 673, P323, 366, 555, Σ1, Φ285, X227, Ω376, β268, 401, γ468, δ796, ε212, 213, η210, θ14, 116, 194, κ240, λ469, ν222, 288, ξ177, π157, 174, ρ307, 313, σ251, τ124, 381, υ31, 194, χ206, ψ163, ω17, 503, 548
eidos	B58, Γ39, 45, 55, 124, 224, E787, Z252, Θ228, K316, N365, 378, 769, P142, 279, Φ316, X370, Ω376, δ14, 264, ε213, 217, ζ16, 152, η57, θ116, 169, 174, 176, λ337, 469, 550, ξ177, ρ308, 454, σ4, 249, 251, τ124, υ71, ω17, 253, 374
opsis	Z468, Υ205, Ω632, ψ94
megethos	B58, H288, Ψ66, ε217, ζ152, λ337, σ219, 249
phyē	A115, B58, Γ208, X370, ε212, ζ16, 152, η210, θ134, 168

(3) limb [s]

gyia	Γ34, Δ230, 469, E122, 811, Z27, H6, 12, 16, 215, Θ452, K95, 390, Λ240, 260, N61, 85, 435, 512, Ξ506, O435, 581, Π312, 341, 400, 465, 805, P524, Σ31, T165, 169, 385, Υ44, Φ406, X448, Ψ63, 627, 691, 726, 772, Ω170, α192, ζ140, θ233, κ363, λ527, μ279, σ88, 238, 242, 341
melea	H131, Λ669, N672, Π110, 607, P211, Ψ689, 880, Ω359, θ298, κ393, λ201, 394, 600, ν398, 430, 432, ξ428, ο354, σ70, 77, φ283, ω368
hapsea	δ794, σ189
rhethea	Π856, X68, 362

(4) flesh/skin

chrōs	Δ130, 137, 139, 237, 510, E337, 354, 858, H207, Θ43, 298, I596, K575, Λ352, 398, 437, 457, 573, 574, M427, 464, N25, 191, 241, 279, 284, 440, 501, 553, 574, 640, 649, 830, Ξ25, 170, 175, 187, 383, 406, 456, O315, 316, 317, 534, Π504, 761, 814, P210, 571, 733, T27, 33, 39, 233, Υ100, Φ70, 168, 398, 568, X286, 321, 322, ψ67, 191, 819, Ω19, β376, δ749, 750, 759, ε455, ζ61, 129, 220, 224, λ191, 529, 398, 430, ξ506, ο60, π145, 182, 210, 457, ρ48, 58, 203, 338, σ172, 179, τ72, 204, 218, 232, 237, 263, φ412, χ113, ψ95, 115, 237, ω44, 156, 158, 467, 500
chroiē	Ξ164
derma	Z117, I548, K23, 177, Π341, δ436, 440, ν431, 436, ξ24, 50, χ362
rhīnos	Δ447, E308, H248, 474, Θ61, K262, 334, M263, N406, 804, Π636, Υ276, α108, ε426, 435, μ46, 395, 423, ξ134, χ278
sarx	Θ380, N832, ι293, λ219, σ77, τ450
kreas	Δ345(1), Θ162, 231, I217, Λ551, 776, M300, 311, P660, X347, Ω626, α112, 141, γ33, 65, 470, δ57, 88, θ477, ι9, 162, 297, 347, 557, κ184, 468, μ19, 30, 395, ξ28, 109, 456, ο98, 140, 334, π49, 443, ρ258, 331, 344, 412, υ279, 348, χ21

例のみである。これに対し，nekros は64例，nekys は75例と非常に多数を数えるが，これらの総てが《死体》または《亡者》の意味で用いられていることは明らかである。亡者を意味する場合には，これを身体表示語と呼ぶことはできないが，ともかくこれら2語が生命を持つ存在について用いられることがないことは明らかである。

問題は sōma の方である。8例の内訳は，以下の通りである。

① *Il*.3.23　ライオンが鹿か山羊の大きな sōma に出くわして喜ぶ

② *Il*.7.79　私が死んだら，私の sōma を家へ送り帰してくれ

③ *Il*.18.161　野山に暮らす牧人たちがひどく飢えている獰猛なライオンを〔動物の〕sōma からどうしても追い払うことができないように

④ *Il*.22.342　私が死んだら，私の sōma を家へ送り帰してくれ

⑤ *Il*.23.169　〔パトロクロスの火葬に際して〕剛胆なアキレウスが，皮を剝がされた山羊や牛の総てから脂肪を取り〔アキレウスの〕死体を頭からつま先まで覆い隠した，即ち皮を剝いだ sōma (pl) を積み重ねたのである

⑥ *Od*.11.53　エルペーノールの亡霊が最初にやってきた，というのも彼は未だ埋葬されていなかったのだ。実際，我々は，〔彼の〕sōma を，顧みられることも埋葬されることもないままに，キルケーの館の内に置き去りにしていた

⑦ *Od*.12.67　〔自然の要害を船で通行するに際して〕今までにそこへやってきた人間の船の一隻たりとも〔難破を〕逃れたものは無く，潮流と苛烈な炎の疾風が船の板木も人間の sōma (pl) も一緒くたに翻弄する

⑧ *Od*.24.187　こうして我々は死んだのであり，我々の sōma (pl) は，未だに顧みられることなくオデュッセウスの屋敷の内に置かれている

以上8例の内，②，④，⑤，⑥，⑧の5例における sōma が死体を意味するものであることは明白であるが，残りの3例については異論の余地が残されている。ヘルター (H. Herter)[16] は，用例①および③を特に重視し，まず③において sōma と nekros (164：apo nekrou deidixasthai) が対比的に用いられている事実を指摘した後，「ライオンは屍肉を食わない」という生物学的観点と「屍肉を食うライオンは勇猛果敢な人物（勇将メネラーオス）の人物描写として適切ではない」という詩作技術的観点の双方から，「sōma は単に身体であって，それが生きているか死んでいるかは問題ではない」と結論している (S.105)。またハリスン (E. L. Harrison)[14] も，sōma を死体の義に限定するのは誤解であるとし，「我々がホメロスの語法から判断しうる限りにおいて，その正確な意味は，単純に身体，つまり個々の人間や動物がそれからできているところの身体的質料 (physical mass) であり，生命の存在や不在はその語義に無関係である。……中略……，sōma は生きていることも死んでいることもある」と述べている (p. 63f.)。これらの見解を念頭に置くならば，用例⑦の sōma も，特に死体と考えなければならないという必然性は持たないであろう。

このように見てくると，「sōma は死体を意味する」と断定したスネルの見解はかなり危ういものと言わなければならないが，sōma が生体をも意味しうるということは，その意味内容の発展という点で，極めて重要な意義を持つ。つまり，スネル説に従えば，「かつて全く死体のみを意味する言葉であったものが，後には生体を言い表す代表的な語としても用いられるようになった」ということになるのであるが，このような語義上の転換は不可能とまでは言えぬにしても，かなり苦しい想定と言わなければならない。

ホメロス作品の成立をどの時期に見積もるかという問題は未だに決着を見ていないが，比較的最近の研究では，起源前8世紀後半ないし起源前700年前後と推定されている[註8]。むろんホメロスが下敷きとしたと推測される神話や伝承はずっと古いものであろうが，彼とほぼ同時代かやや下る時期の人と目されるヘシオドスにおいて，既に明確に生体を意味する語としての sōma の用例が見られること (Erga, 540)，専ら死体・死人に関わる語として nekros や nekys が sōma に比べれば圧倒的頻度で使用されていること，そして，後に生体を意味する代表的な言葉へと発展したことを考え併せれば，やはりホメロスの sōma にも生命への関わりの可能性を認めるのが妥当であろう。

しかし実際には，ホメロスにおいて sōma という語が人体の生々しさや活動性を描く際に用いられていないことも事実である。8例の内5例は明らかに死体の記述であり，残りの3例にしても瀕死の感は否めない。ヘルターやハリスンが言うよう

に，本来 sōma が生死と無関係であるとするなら，なぜホメロスの sōma には死の影がつきまとうのかという問いに答えねばならないが，この点については，推測の域を超える見解は提出されていない。ヘルター[16]（S.105）は「ホメロスはこの用語〔＝sōma〕に対する嫌悪感を持っていた」と言い，ハリスン[14]（p. 64）も「ホメロス作品の登場人物の経験の範囲に従って普通は死んでいる」と言うが，いずれも明確な理由説明とはなっていない。

筆者もまた断定的に結論づけることはできないが，一つの可能性を提示しておきたいと思う。ギリシア人の間に《sōma＝sēma》（身体は墓場なり）という連想が働いていたことは確かである[注9]。この連想の起源について文献的に確証することは困難であるが，ピュタゴラス派やオルペウス教において重視されたと言われるから，連想そのものはかなり古くからあったものと推測される。sēma はもともと《兆候，目印》という意味であり，転じて《墓場》を意味することになったのであるが，この意味での用例はホメロスにおいても認められる。つまり《sōma＝sēma》という連想，またはそれに近い連想がホメロスにも有ったと推測することができる。

以上から，「sōma が生体か死体か」という問題を設定した場合，スネルの判定は偽である可能性が高い，と言わねばならない。しかし，ホメロスの文脈においては，sōma は死体か瀕死体のどちらかであるのだから，結局 sōma は，nekros, nekys とともに《死体表示語》として扱ったとしても，大過無いと言えよう。

II—4　demas, eidos, megethos, phyē
——容姿と体格：統体としての身体把握

スネルが表2に示された5語（以下，まとめて《容姿・体格表示語》と呼ぶ）の内，demas のみを取り上げ，それを《貧弱な代用品》と断じていたのに対し，筆者は，eidos, megethos, phyē の3語[注10]を追加することを要求する。まず，その追加の理由を述べる。

その理由の第一としては，これら4語の基本的語義の近似性を指摘することができる。リデル＆スコットの辞書を信頼する限りにおいて，これら4語は，我々日本人が，体つき，姿形，体格，身形といった日本語から連想する一連の観念と，ほぼ同様の観念群を成していると言えるであろう[注11]。

第二の理由は，表3に示されるように，これらの語が極めて頻繁に並列的に，しかも同格語として使用されていることである。

さらに第三の理由として，語法の共通性が挙げられる。即ち，demas の総てと，megethos, phyē, eidos の大部分が関係の対格（本稿注3参照）という語法で用いられているのである。

以上3つの理由から，筆者は，標記の4語の近親性は極めて高いと判断する。そして，これら4語の用例を合計すると，実に105例を数えるのであり，スネルによって重視された gyia と melea の合計74例をはるかに上回っているのである。

しかしながら，eidos には関係の対格以外の用例が12例，megethos には2例，phyē には3例有る。eidos の場合について言うと，主語または主語の同格語となる主格が2例，他動詞の目的語となる対格が5例，不定詞の主語となる対格が1例，前置詞の客語となる対格が2例，同じく与格が2例，megethos の2例と phyē の3例は，いずれも動詞（句）の目的語となる対格である。スネルの論法は，「関係の対格であるから身体の具象性を表示しえない」というものであった。しかし，demas と eidos 等の用例，語義，語法上の近親性は明らかなので

表3　ホメロスにおける容姿・体格表示語の並記回数

	総　数	c. dem.	c. eid.	c. meg.	c. phy.	並記回数
demas	42	—	8	0	3	11
eidos	43	8	—	7	5	17
megethos	10	0	7	—	2	7
phyē	10	3	5	2	—	7

※並記回数が各欄の単純和と異なる場合があるのは、3語が並列されている箇所が3箇所有るためである。　demas (double)-eidos-phyē：ε212-213, eidos-megethos-phyē：B58, ζ152

あるから，eidos 等にこのような用例が有ることによって，容姿・体格表示語に関する限り，スネル説を深刻に疑ってみる必要がある。

むろん，全体的に見れば容姿・体格表示語は関係の対格の用例が圧倒的に多いのであって，確かにその用法は制限されていると言えるかもしれない。関係の対格という語法は，一種の副詞的な用法であって，主語とも動詞の客語ともならない，つまり文法上は，必須の文成分とはならない語法だからである。しかしこのことによって《容姿・体格表示語》に具象性が伴わない，と断言できるであろうか。

例えば日本語に《は》という《係助詞》が有る。これは本来《格》を示す語ではない。つまり，《は》を付与されただけでその語句が文成分としての資格を得ることは無い。しかし，この文法的性質が，「《は》に導かれた語句には具象性が伴わない」という判断の根拠たりうるだろうか。実際には，しばしば，《は》は，主語や目的語など文の重要な構成要素を導いているのである。

これと同様の事情が《関係の対格》にも有る。確かに，《mīkros eēn demas》（体格の点で小さかった）とか，《marnanto demas pyros aithomenoio》（燃え盛る炎の如くに戦った），或いは単に外見が誰かに似ている，という場合の demas は確かに単なる繋ぎの言葉であって，文法や韻律が要求する語に過ぎない。しかし《最善である》（aristos），《賞賛すべき》（agētos），《卓越性》（aretē）といった語と共に用いられる demas や，《思慮》（phrenes），《仕事》（erga）と並列される demas はどうであろうか。これらの demas が表示する観念を無視することは，決して許されないであろう。「関係の対格であるから具象性を表現しない」というスネルの判定は普遍妥当的なものでは無いのである。

ヘルター[16]（S.94）はスネルに対する反論として，「ともかく demas という一語を彼〔＝ホメロス〕は持っている。それは確かに《貧弱な代用品》かもしれないが，これが有ることによって，たとえそれが全く重大な役割は果たしていないとしても，〔ホメロスの〕語彙に身体の統一性が全く欠如していると言うことは決してできないのである。demas という語は，——単に四肢が問題なのではなくて，身体全体が問題である時に——gyia とか melea という表現方式が残した隙間を埋めているのである」と述べている。

筆者は，ホメロスにおいて《身体の統一性》の表現は，容姿・体格表示語によってのみ可能であった，というヘルターの指摘に全く同意する。しかしヘルターは，demas を《貧弱な代用品》と見るという点では，スネルの見解を踏襲している。demas 以外にも容姿や体格を表示する語が有り，それらは必ずしも関係の対格において用いられているわけではないこと，また関係の対格といえども文脈によっては或る種の具象性を表示しうること，以上二つの理由により，筆者はスネルの結論を大幅に修正し，《容姿・体格表示語》は《貧弱な代用品》などではなく，ホメロス的身体観の表示方式として重要な意義を有するものであった，と主張する。

II—5　gyia と melea——四肢：生きて活動するものとしての身体

筆者は，この点に関しては，基本的にスネル説に同意している。既に述べたところと重複する部分もあるが，スネルが《四肢表示語》について述べていることを確認しておこう。

まずスネルが注目するのは，人間の生々しい動きや様子（疲れる，震える，力が漲る，等）の表現に際して用いられるのが gyia と melea であり，これらの語が複数形である，という点である。そして彼は，「gyia はそれが関節によって動かされている限りにおいて四肢であり，melea はそれが筋肉によって力を持っている限りにおいて四肢である」（S.16），「人間の実質的な身体（der substantielle Körper）は単一体としてではなく，集合体として把握されている」（S.17），「〔関節と筋肉を極端に際立たせた〕初期ギリシア人の絵は人間の可動性を把握し，〔近代人の〕子供の絵は人間の緊密性を把握している」（S.17：本稿図1参照），「彼〔＝ホメロス〕にとっては四肢が生命を持ったものであり，彼の注意を惹くものなのである」（S.18），と述べ，《四肢表示語》の重要性を力説しているのである。

筆者は，前項において，《容姿・体格表示語》の重要性を指摘し，この点に関するスネルの無関心を批判したのであるが，筆者もまた，ホメロスにおける《四肢表示語》の重要性を無視する訳にはいかない。スネルは四肢表示語によって特徴的に表現される観念が《可動性》であると言う。《容

姿・体格表示語》が身体の動きを表現するものでない以上，もし《四肢表示語》が無ければ，身体的事象を表現するホメロスの語彙は著しく乏しいものとなっていたことであろう。生きて活動するものとしての人間の身体——むろんそれは古典期以降に見られるような，正に《身体》としての統一的把握においてではないが——は，始め，《四肢》として把握されたのである。

しかしながら，gyia や melea の用例を見ていくと，それらが表現する可動性があまり積極的な意味ではないことに気づかされる。gyia の場合で言えば，51例の内，《崩れさせる》（lȳein）または《崩れ落ちさせる》（hypolȳein）という動詞と共に用いられている箇所が実に23例，《震え》（tromos）または《震える》（tromeō）と共に用いられている箇所が10例，《疲れ》（kamatos）または《疲れる》（kamnō）と共に用いられている箇所が9例有る。若干重複している用例や否定文の用例もあるが，それらを差し引いても，40例以上が消極的な動きを示す語と共に用いられているのである。比較的積極的な語感を持つ語を捜してみても，《軽やかな》（elaphros）という語が2度使われているだけで，他は消極的な意味の語の打ち消し表現が数例見られるのみである。

もう一つの四肢表示語，melea について言えば，こちらはもう少し積極的な意味合いを持っている。melea は，《震える》の他に，《力》（īs），《強さ》（sthenos），《武勇》（alkē）といった語と共に用いられており，また1例のみであるが《動く》（kīneō）という動詞と共にも用いられている。ただし，《震える》《崩れ落ちる》といった動きそのものを表す語との直接的な結びつきは gyia の場合ほど顕著ではない。

スネルは四肢の《可動性》を非常に重視しており，確かに四肢表示語の多くは《動き》を意味する語，或いは連想させる語と共に用いられているのではあるが，我々が可動性という言葉について抱いているような，より積極的な動きのイメージ——例えば，動く，走る，跳ぶ，戦う，等——は，ホメロスの四肢表示語には見られない。従って，《身体の具象性》を表現する語として四肢表示語だけを重視するスネルの見解は再び修正を必要とする。つまり，「《四肢表示語》は極めて重要であるが，それだけではない」，と。

II—6　chrōs と sarx——身体の成分としての皮膚と肉

《皮・肉表示語》の中で我々の検討課題となるのは，chrōs と sarx のみである。なぜなら，derma や rhīnos は皮膚というよりは皮革という意味であるし，kreas は食事ないし食対象としての肉を意味するものだからである。また，わずか1例しか用いられていない chroiē から，それ独自の意味内容を読み取ることは困難であるため，ここでは考察の対象としないことにする。

スネルは，「chrōs が皮膚であることは疑いの無い事実である。……中略……。しかし一連の言い回しにおいては，chrōs は〔demas，gyia，melea よりも〕一層はっきりと身体の代わりに用いられている。peri chroi dūseto chalkon（彼は武具を身にまとった）というように——これを文字通りに言えば，自分の皮膚のまわりに，である」(S.17) とし，しかし「chrōs は身体の外郭（Grenze）にすぎない」から，やはりそれは《身体の具象性》を表す語ではない，と結論づけている。

衣服や武具を身にまとうという場合の chrōs や，身体を洗うという場合の chrōs は人体の外郭としての肌であり，これをスネルが身体という語の代用品と呼ぶことに問題は無い。しかし，chrōs はまた《負傷》と密接な関係を持つ語である。「槍が肌を引き裂く」「肌が血にまみれる」「痛みが肌を貫く」といった表現がしばしば見られるのである。この場合の chrōs は極めて生々しい身体的事象を表しており，しかもこのような事態は他の身体表示語によっては表現されないのである。従って，スネルが chrōs に具象性を認めなかったのは片手落ちではないか，という反論も予想されるのである。

しかしながら，スネルの判定は，結果的には大過無いものであると言える。なぜなら，負傷するものとしての皮膚は決して身体の全体を意味してはいないからである。仮に，体表面のいたるところに傷を負う，という事態が述べられているとしても，皮膚の下には肉が有り，さらにその内部に骨がある以上，皮膚は部分的なものに過ぎない。四肢もまた部分と呼ばれることと区別して言えば，皮膚や肉は身体の《成分》の資格に留まらざるをえないのである。

他方，sarx の6例中3例は食対象としての肉であり，それ以外の3例も「死ねば肉と骨と腱が分

解する」(*Od*.11.219)「恐怖で四肢の肉が震える」(*Od*.18.77)「猪が牙を肉に突き刺したが骨には届かなかった」(*Od*.19.450) というように sarx 自体が身体を表示しているわけではなく，それは身体の部分ないし成分を意味するものである。

従って，結局のところ《皮・肉表示語》は，単に外郭を表示するか，さもなければ部分または成分を表示するに過ぎないのであって，身体表示語としてはあまり重要性を持たないと言える。ただし，《着衣》，《洗浴》，《負傷》等，主として chrōs という語によってのみ表現される身体的事象が有る以上，これを全く無視することは許されない。ヘルターは「demas が四肢表示語の隙間を埋めている」と言ったが，これに倣って言えば，「chrōs が四肢表示語と容姿・体格表示語の隙間を埋めている」と言うことができる。

II－7　スネル説の総括

筆者のスネルに対する反論は，主として，筆者が《容姿・体格表示語》と呼ぶものに関連している。スネルは，demas を，ホメロス作品の内では，後の sōma に最も近いものとして評価しながらも，結局のところ，それは《貧弱な代用品》に過ぎない，として，この語が《身体の具象性》を示す語ではない，と結論づけ，また demas 以外の容姿・体格表示語についてはいっさい言及していない。しかし以上の検討から，筆者には，スネルが demas に下した判定が妥当性に欠けるものであるように思われる。その理由を簡単にまとめれば，以下の通りである。

①容姿・体格表示語の用例は，《貧弱な代用品》として切り捨てるにはあまりにも多数である。

② demas は，限られた言い回しにおいてではあっても，スネル自ら認めているように，何らかの統一的身体を表示している。demas やその他の容姿・体格表示語 (eidos, megethos, phyē) のそれぞれを，明確な概念と呼ぶことはできないが，これらは，一種の観念群を成しつつ，《身体の統一性》を表現している。

③容姿・体格表示語が表現する《身体の統一性》という観念は，四肢表示語（四肢の集合）では決して表現しえない。

本稿の始めに，筆者はスネル説を《画期的》と評しておいたのだが，それは，「ホメロスにおける身体という観念の表示方法が実に多種多様な語によって行なわれていることへの着目とその分類，および《四肢表示語》が優勢であるという事実の解釈，すなわち，ギリシア古典期以降のものとは全く別種の身体把握方式がホメロスにおいて見られることへの洞察の鋭さ」において画期的だったのである。

しかしスネルは，《四肢表示語》の重要性を強調する余り，その他の身体表示語の問題をやや疎かにしてしまったようである。

ホメロスにおける《身体表示語》の主要なものは，概ね二群に分類される。その第一群は《四肢表示語》であり，これは部分の集合体として《身体の可動性》を表現するものであり，第二群は《容姿・体格表示語》であり，これは統体（ひとつの全体）として《身体の統一性》を表現するものである。これら両者は，生体を全体として表示し，しかも身体の具象性を表現する語として，共にホメロスの語彙に欠くことのできないものである。そして，なおこれらの語によって表現できない隙間を埋めているのが《皮・肉表示語》なのである。

III．《心一身》の対置について

ホメロスにおいて心的機能ないし心的実体を表示する語は身体の場合以上に多種多様である。ここで筆者は《機能》という言葉を使うことは控えたいと思う。というのは，《心的機能》という概念は，その範囲設定が極めて流動的だからである。従ってここでは，実体として把握可能なものを念頭において論を進めることにする。

それでは，ホメロスにおいて《心的実体》はどのような語によって表示されているのであろうか。それは大きく二群に分けられる。一方は，《kradiē》《kēr》《ētor》（いずれも心臓）《phrēn (pl.: phrenes)》（横隔膜）のように生理的器官名を原義とする語群であり，他方は，《noos》《thymos》《psychē》——これらを正確に訳すことは困難であるが，一応の訳語として，分別〔の座〕，命，霊魂，としておく——のように生理的器官とは一線を画する語群である[注12]。むろん，より固有の意味で心的実体と呼びうるのは第2の語群であるが，ホメロスにおける《phrēn》は，既に生理的器官からの類推としてではなく，心的実体そのものとして，《思慮の座》を意味すると考えられる。従って，ここでは，第2群の3語にこれを加えた4語を心的実体を意味する主要な語とし

て理解することにする。

まず《sōma》について言えば，1例だけ，《psychē》と共に用いられている箇所がある（*Od*. 11.53）。それは，「まずエルペーノールのpsychēがやってきた。……我々は〔彼の〕sōmaを置き去りにしていた」というものであった（本稿II－3，引用⑥）。ここでは，psychēとsōmaが，明らかに一対のものとして使用されているのである。むろん，ここでのpsychēが霊魂または亡霊を，またsōmaが死体を意味するものであることは明らかであり，またその直前（11.37）には，《亡者の霊魂（psychai nekyōn）》という表現が見られることからすれば，ここから，我々が期待するような，生きて活動する存在者の心—身関係を読み取ることはできない。しかし，既にホメロスにおいてpsychē-sōmaが対置的に用いられていたこと，そしてそれが《死体—霊魂》という把握方式——これを正しい意味で人間把握と呼べるとは思わないが——であったということは，身体把握の原初的形態の探究という意味では重要な意味を持つ。nekros，nekysの多用という事実も考え併せれば，ギリシア人の身体思想は，まず《死との直面》という事態から生じたのである，と言えよう。

次に，《容姿・体格表示語》については，3例が《noos》と，また6例が《phrenes》と共に用いられているが[註13]，それらは，或る人物を評価するに際して「姿においても，思慮においても優れている」とか「見かけは立派だが分別が無い」という文脈において用いられている。つまり，ここでの《容姿・体格表示語》と《心的実体表示語》の関係は対置というよりは並列であって，ここから《心—身》がどのように関係しているかを明確に読み取ることは困難である。しかし，その基本的語義からすれば，これらの語は《容姿・体格—思慮・分別》という対置関係において並記されていることはほぼ明らかであると言えよう。

これに対し，《四肢表示語》の場合には，《thymos（命）》とのかなり明確な対置が認められる。gyiaの場合には54例中4例とさして問題とならないが，meleaの場合には23例中6例を数える。「命が四肢から去る」と表現されるこの対置の図式は，文献的に確認できる明確な心身関係把握方式としては史上最古のものと言えるであろう[註14]。ただしこれは臨終の場面の描写であるから，《命—四肢》関係もまた《死体—霊魂》関係の影を背負っていると言わなければならない。

最後に，《皮・肉表示語》について言えば，まずchrōsは，時に心的実体表示語との併用が認められるが，その関係は明らかでない。例えば，「肌から槍を引き抜くと，……血が流れ出て，……命（thymos）を弱めた」（*Il*.11.456-8）という時，chrōsとthymosの間に直接的関係が有るとは認められないのである。他方，sarxについてはわずか1例のみではあるが，「〔人が死ぬと〕もはや腱が肉と骨とを保持してはおかずに炎のような激しい力が破壊してしまう，いったん命（thymos）が骨を離れてしまうなら。しかるに霊魂はまるで夢のようにふらふらと宙に浮いている」（*Od*.11.219-222），という非常に興味深い記述が有る。ここでは，現世において生命を宿している実質的存在が《肉と骨》と言われているのであるが，同巻の201行には「四肢（melea）から命（thymos）を奪う」という表現も用いられているのであるから，結局この場合の肉と骨は四肢の言い換えに過ぎない。従って《皮・肉表示語》がそれ自体の資格において《心的実体表示語》に対置されているとは認められない。

ホメロスの心身関係把握においては，古典期の《psychē-sōma》関係ほど明確な図式ではないが，ともかく《心—身》の対置関係が，身体の側から言えば《対心性》が認められる。しかし，対心性が強調される場合には，《psychē-sōma》《thymos-melea》の場合にそうであったように，《死》という契機が強調される。《容姿・体格表示語》の場合には死の影は薄いが，対置の図式はthymos-gyia関係ほど明確ではない。

IV 結　論

以上の考察は次のように要約することができる。

1．ホメロスにおいては，後代のsōmaや，我々の身体（body）に相当する語は用いられていない。我々が身体という語を用いて表現する事態は，実に様々な語によって表現されている。しかもそれらの語は文脈（場面・言い回し）によって使い分けられている。

2．身体表示語は，《死体表示語》《容姿・体格表示語》《四肢表示語》《皮・肉表示語》に分類されるが，これらの内，特に重要なものは，《容姿・体格表示語》と《四肢表示語》である。

3．ホメロスは，《身体の統一性》を表す《容姿・体格表示語》と《身体の可動性》を表す《四肢表示語》の双方によって，生体としての身体を全体として表示している。

4．《死体表示語》は，ギリシア的身体把握の原初形態が《死》を契機としていたことを知る上では重要であるが，生体との積極的な繋がりが認められない以上，体育学的視点から見る限り，これに重大な身体思想的意義を認めることはできない。

5．《皮・肉表示語》は，以上の諸語によってなお表現しえない場面の描写においては必要な語であるが，身体をその全体性において表示する語ではない。

6．ホメロスにおける《心—身》関係把握は，《死体—亡霊》《容姿・体格—思慮分別》《四肢—生命》という複数の対置関係によって示されている。

以上の諸点から，我々が通常《身体》に帰している諸観念，即ち，《対心性》《生体性》《全体性》《統一性》《可動性》といった徴表がホメロス的身体観の内に含まれている，と言うことができる。しかしホメロスはこれらの諸徴表を包括する身体表示語を持っていなかった。従ってホメロスによって，ギリシア古典期以降のような意味で身体が把握されていたと考えることはできない。むしろ，包括的概念を用いることなく身体を把握していた，という点にホメロス的身体観の最大の特徴が認められるのである。

本稿において，《容姿・体格表示語》がホメロス的身体観において主要な役割を果たしている，と見定められたことは，身体思想史的に見て重大な意義を有すると考えられる。それは，古典期における身体の思想の萌芽が，既にホメロス中に認められる，という点においてである。即ち，古典期の思想において，身体（sōma）に帰せられる固有の優秀性（aretē［agathon］sōmatos）は，(1)健康(hygieia)，強壮(euexia)，(2)力の強さ(ischys, rhōmē)，動きの速さ（tachos），(3)容姿の美しさ（kallos），体格の大きさ(megethos)などであるが[注15]，ホメロスにおいて，(2)群の観念は《四肢表示語》との関連において，また(3)群の観念は《容姿・体格表示語》との関連において言及されているのであり，ホメロスは，身体に関しても，古典思想の基礎を成している，と言えるからである。

しかしながら，プラトンやアリストテレスが最も重視した《健康》や《強壮》に直結する観念は，ホメロス中には見あたらない。おそらく，明確な《心—身》分節による人間把握，即ち，包括的身体観念の不在が，その理由であろう。従って，《psȳchē-sōma》という対置が定着する時期と作品を洗い出すことが，本研究第二報の課題となる。

注

1）スネルの論文が画期的であることは，その引用頻度の高さによっても知られる。ホメロスおよびギリシア初期の心身問題を扱った著書や論文においてスネル説に言及しないものは殆ど無いと言ってよかろう[7~12,14,16]。そして，それらにおいていくつかの厳しい批判を受けているにも拘らず，比較的最近の論稿においても，その基本的枠組が利用されていることは，その基本的理論枠組の優秀性を物語っていると言えよう。例えば，角田[26] 5－7頁参照。

2）即ち，「ホメロスとは実在の人物であったか」「二大叙事詩はホメロスによって作詩されたものであるのか」「それらはホメロスの独創なのか，彼は編者に過ぎないのか」といった，古代詩学の専門家の間でも決着を見ていない厄介な諸問題が有る。本稿では，「恐らくは一人の優れた詩人，即ちホメロスが，既成の短いバラッド風の叙事詩を巧みに使用してかの長編叙事詩を編んだのである」，とする高津[19]（37-46頁）の説に従って論を進めることにした。

3）Akkusativ der Beziehung＝accusativus relationis (vel limitationis). 即ち，「体格の点で」とか「姿について言えば」という語法のことである。

4）これは，スネル自身が断っているように，起源前2世紀前半に活躍した文献学者，アリスタルコスの見解を踏襲したものである。

5）その理由については，Die Entdeckung des Geistes, S. 20-21参照。

6）ウッドハウスの辞書では，名詞の文法的性を示すための冠詞と出典に関するごく簡単な注が記されているが，繁雑を避けるためこの引用では無視した。またこれに続いて，Group of individuals, The body politic という意味での用例や形容詞的語形の用例の記載があるが，本稿の課題とは直接関係しないので省略する。

7）この2語を追加した理由は，本稿II－4において述べる。なお，表1で区別された《flesh》と《skin》を表2でまとめたのは，基本的語義間に類似性が認められることに加え，II－6で見るよ

うに，その存在資格に共通性が認められるからである。また，表1の複数群に上がっている語は，文脈上より適切と思われる群に含めた。

8）たとえば，オックスフォードの『古典文学参照事典』の初版[15]では，「よく分からないが多分9世紀」とされているのに対し，第2版[18]では，「700年頃盛期」とされている。

9）プラトン『ゴスギアス』493A，『クラテュロス』400C。

10）表2に示された語の内，opsis を無視したのは，以下に述べられる第2および第3の理由に該当しないからである。

11）参考までに，リデル&スコットの辞書における代表的語釈を挙げておく。demas: the frame of man, the body, stature; eidos: that which is seen, form, shape; megethos: greatness, magnitude, size, height, stature; phyē: (fine) growth, (noble) stature.

12）ただし，これらの語も生理的な事柄に基礎づけられているようではある。《psychē》が《息》を語源としていることはよく知られているし，ハリスン[14](p. 65f.)の推測によれば，《noos》は《クンクンと匂いを嗅ぐこと》を，《thymos》は《急速な動き》，転じて《煙や蒸気の速い動き》を語源とする語である。

13）その内訳は，noos＋demas，noos＋eidos，noos＋demas＋eidos：各1例，phrenes＋eidos：2例，phrenes＋megethos，phrenes＋demas＋eidos，phrenes＋eidos＋megethos，phrenes＋phye：各1例，である。

14）これを念頭に置くとき，アリストテレスが《心魂（psychē）》の重要な機能として《生命維持》を挙げていることは非常に興味深い事実である。

15）プラトン『法律』I.631B-C,アリストテレス『弁論術』I.5,1360 b21-23, 1360b39-1361all, 1361b3-26, 等参照。

文　献

〔ホメロスの作品〕

1）Homerus (rev. by Monro DB and Allen TW) (1902-1912), Homeri Opera. 5vols, Oxford UP (OCT), Oxford. used vol I-II : 1920³, III : 1917², IV : 1919².

2）Homer (rev. & tr. by Murray AT) (1924-1925), Homer the Iliad. 2vols, Harvard UP (LCL), Cambridge Mass.

3）Homer (rev. & tr. Murray AT) (1919), Homer the Odyssey. 2vols, Harvard UP (LCL), Cambridge Mass.

4）ホメーロス(呉茂一訳) (1953-1958), イーリアス. 全3冊, 岩波書店（文庫）.

5）ホメーロス(呉茂一訳) (1971-1972), オデュッセイアー. 全2冊, 岩波書店（文庫）.

〔その他〕

6）Aristoteles (rev. by Ross WD) (1959) : Aristotelis Ars Rhetorica. Oxford UP (OCT), Oxford.

7）Bremmer J (1983) : The Early Greek Concept of the Soul. Princeton UP, Princeton.

8）Clauss DB (1981) : Toward the Soul——An inquiring into the meaning of PSYCHE before Plato. Yale UP, New Haven and London.

9）Darcus, SM (1979) : A Person's relation to ψυχή in Homer, Hesiod, and the Greek Lyric Poets. Glotta 57 : 30-39.

10）Darcus, SM (1979) : A Person's relation to φρήν in Homer, Hesiod, and the Greek Lyric Poets. Glotta 57 : 159-173.

11）Darcus, SM (1980) : How a Person relates to θυμός in Homer. Indo-germanishcen Forschungen 85 : 138-150.

12）Darcus, SM (1980) : How a Person relates to νόος in Hesiod and the Greek Lyric Poets. Glotta 58 : 33-44.

13）Gehring A (1970) : Index Homericus mit Appendix Hymnorum Vocabula Continens. Georg Olms Verlag, Hildesheim.

14）Harrison EL (1960) : Notes on Homeric Psychology. Phoenix 14 : 63-80.

15）Harvey P (1937) : The Oxford Companion to Classical Literature. Oxford UP, Oxford.

16）Herter, H (1975) : Soma bei Homer. derselbe, Kleine Schriften. Wilhelm Fink Verlag, München, S. 91-105. (orig 1957).

17）Hesiodus (ed. by Solmsen F) (1970) : Hesiodi Theogonia Opera et Dies Scvtvm cum Fragmenta Selecta. Oxford UP (OCT), Oxford.

18）Howatson (1989) : The Oxford Companion to Classical Literature, 2nd ed. Oxford UP, Oxford.

19）高津春繁 (1977)：ギリシア文学史（改版）. 岩波書店（全書）.

20）Liddel HG and Scott R (1940⁹) : Greek-English Lexicon, Clarendon Press, Oxford.

21）水野忠文他 (1961)：体育史概説——西洋・日本. 杏林書院.（この著作は版次・年度の記載が不明確なので取り敢えず初版年度を記したが，筆者が参考にしたのは1990年印刷のものであることを付記しておく）

22）Onians RB (1973) : The Origin of European

Thought—About the body, the mind, the soul, the worlds, time and fate. Arno Press, NY. (orig 1951).

23) Plato (rev. by Burnet J) (1900-1907) : Platonis Opera. 5vols, Oxford UP (OCT), Oxford.

24) Rhohde E (1961), Psyche — Seelecult und Unsterblichkeitsglaube der Griechen. Wissenschaftliche Buchgeselschaft, Darmstadt, 1961. (orig 1898[2]).

25) Snell B (1986[6]) : Die Entdeckung des Geistes—Studien zur Entstehung des europäischen Denkens bei den Griechen. Vandenhoeck und Ruprecht, Göttingen. 邦訳 (1974), 精神の発見—ギリシア人におけるヨーロッパ的思考の発生に関する研究 (新井靖一訳). 創文社 (但し原著第3版 (1955) 準拠, 本文中の引用は原著第6版による).

26) 角田幸彦(編著) (1989), 精神史としての哲学史, 東信堂.

27) Woodhouse SC (1910) : English-Greek Dictionary. Routledge & Kegan Paul, London.